



# 私の 歩んできた道

## 三菱重工の技師の時代 第1回

早稲田大学名誉教授 中沢 弘

突然この連載への執筆を依頼され困惑している。若いエンジニアや研究者の方々に参考になるような道を行ってきたわけではないが、少しでもお役にたてることを願って筆を執ることにした。

私は早稲田大学理工学部機械工学科に約30年間奉職してきた。このような職で研究と教育に専念できたことはとても幸せなことだと思う。どうしてこのような職に就くことができたのかというと、これは私の人生哲学であるが、小学生の時のことがきっかけだったと考えている。

私は小学生の時から科学の本を読むのが好きであった。ある時小学校で先生が、全く教えていない問題ばかりの理科の試験を実施したところ、私だけが100点を取ってしまい、感激した先生は私に褒美をくれた。そのようなことがあったせいか、小学校3年生のある日、学校から一人でぶらぶら歩いて帰ってくる道すがら、“将来僕は科学者になりたい”という夢を突然持つようになった。この夢は後の私の人生で岐路に立った時、いつも頭の隅で顔を出し、私の人生の進路を決めてきたように思う。

夢（より具体的にビジョンという場合もある）とは、その人の人生を導いていくパワーのある羅針盤だと私は思っている。夢は思い続けると必ず実現することを私はこれ以外の夢でもいろいろ経験しているし、古今東西の大きな仕事を成し遂げた人の履歴をみても、それは事実であるように思う。工学部の教授が科学者の定義に入るかどうかはさておき、研究・教育に専念できるこの仕事こそ私が求めてきた人生だったと考えている。

私は1961年に早稲田大学第一理工学部機械工学科を卒業して三菱重工（当時の名称は新三菱重工）に就職した。現在は学部生の半数以上の方が大学院に進学する時代だが、当時は大学院に進学する人はほとんどおらず、当然の流れとして私も就職する道を選んだ。

就職先を決めるとき、三菱重工と自動車メーカーのどちらを選ぶか悩んだが、船から航空機まで当時としては技術力が高いとみられていた三菱重工の方を選んだ。入社してみても技術の蓄積の豊富さもさることながら、優れた人材の多さに圧倒された。

私は広島県にある三原製作所の車両設計課に配属された。ここはこの事業所のエリートコースとされており、上司の課長は東大出の秀才、係長は京大出の秀才であった。私はこの係長の下で仕事をとことん鍛えられた。出す図面、出す図面、ことごとく問題点を指摘され、この係長と議論した。図面を前に二人で計算尺（当時は電卓すらなかった）を駆使して議論したが、最初のうちは当然ながら10戦10敗で歯が立たなかった。5、6年してようやく五分五分の勝負になったように思う。しかし、後の私のエンジニア人生にとってこの経験は大変に役に立った。

入社した年には、まだハッチング・エンジニアもいいところなのに、交流電車の油圧式駆動装置の開発を私一人に任された。このプロジェクトは例の秀才係長の指導の下に見事に完成し、実際に電車に組み込んで、試運転も成功させたが、諸般の事情で実用化にはならなかった。しかし、今振り返ると西も東もわからない駆け出しエンジニアの私が良くできたと思う。

その後、その事業所で取り上げる新製品の開発は常に私のところに回ってきて大変であったが楽しかった。

入社6年目にはギリシア国鉄に輸出するディーゼル機関車25両のとりまとめ責任者を命ぜられた。3名の仲間とその仕事に取り組んだが、車両設計に配属されながら初めての鉄道車両の設計・製造なのでそれなりに大変だった。しかし、優秀な仲間にも助けられてなんとかまとめられた。赤い色のこのディーゼル機関車はギリシアのペロポネソス半島を一周する路線を走っていたが、現在は退役している。

入社以来、実際の仕事をしていて、大学での勉強が全く不十分であったことを思い知らされた。早く一人前の技術者になりたいと、寮に帰ってから必死にいろいろなことを勉強した。この時に勉強したことがやがて後の研究・教育に大変役立っている。若いときはやはり必死に勉強するものだとつくづく感じた。

7年目の春に仕事が一段落した時、夢を実現させるためには早く大学に戻らなければならないと考えた。しかし、会社を辞めて早稲田大学大学院を受験しても合格しないかもしれないし、たとえ合格しても、その後の人生は保障されていない。私はこのような時いつも“この道を選んだ結果失敗しても、この道を選ばないで人生の最後で後悔するよりはましだ”と考えて行動している。試験は無事合格して修士課程に入学し、学部のお世話になった恩師の稲田重男教授の研究室に入った。この時の大学院入試も大変だった。かなり難しい試験であったが、幸いに仕事を通して身に付いていたことが役に立った。結果は良い成績だったらしく、面接の時に先生たちから良い成績を取れた理由を何度も聞かれて返事に困った記憶がある。

この年に私は結婚した。言ってみれば学生結婚である。

そして会社を辞めた4年後の1968年12月、極寒のモスクワの空港で日本航空の飛行機が離陸に失敗して多数の日本人が亡くなる事故が起きた。そのなかに車両設計課で私の周りに座っていた仲間の5、6名も含まれており、全員が亡くなってしまった。もし私が重工を辞めないで残っていたら、当然その新製品開発の仕事は私が責任者になっていたはずで、現在私はこの原稿を書いていなかったであろう。その時以来、私のこれからの人生は社会のために働かなければならないと感じた次第である。